
魔血吸の在り方

羊妨害者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔血吸の在り方

【Nコード】

N6764Z

【作者名】

羊妨害者

【あらすじ】

メチャクチャな不幸に襲われた僕は、気付けば異世界に居た。初っ端から最悪な自体が襲ってくるけど生存本能全開でなんとか生き延びてやったぜ！ってあれ？なんか体が変わるんだけど・・・もしかしてこれって・・・！？

僕の終わりと始まりについて（前書き）

処女作です、どこるか初めて物語を書きます。

小説家になろうさんに書かれた作品がおもしろかったので、皆様の暇つぶしに貢献出来ればと思い書いた作品です、拙筆な上、筆に任せて書いているので、それでもよいという方はどうぞ、お読みくださいませ。

僕の終わりと始まりについて

目を覚ますと世界が逆さまになっていた

足の方に木々が伸び、その先に空がある

頭上に地面があり、とても質の良さそうな腐葉土もそこにあった

そんな中、寝ぼけた頭で色々考えた挙句、僕は呟いた。

「じじ、・・・どじじ?」

それが異世界に来て初めてのセリフだったことを、僕はまだ知らない

< 魔血吸の在り方 >

そんな訳で、段々と晴れていく意識の中、徐々に自分の状態が理解
出来てきた

僕はどうやら背の高い木の枝にズボンが引っ掛かって、逆さ吊りに
なっているようだ

もちろんそういう事が日常的に起きるほど、アグレッシブな人々が僕の家の周りに住んでいることはない（僕はそう信じている）し、当然僕にも逆さ吊りで寝る趣味はない。

そうなつてくると、自然に、意識がなくなる前のことについて考えはじめる。

そこで僕は思い出した。

「そうだ、僕は・・・何故か海外旅行になつた修学旅行で飛行機に乗つてる途中にハイジャックにあつて何故か僕だけ見せしめに殺されかけたところをなんとか反抗し、反撃し、遂に無力化に成功しかけたところでハイジャック犯の最後の抵抗で扉から突き落とされ太平洋の真ん中にヒモ無しバンジーしてなんとか海にうまく飛び込んで水面に浮いていき、遠くに見える無人島に流されながら泳ぎながらなんとかたどり着き、水源を確保して食料を探し、大丈夫そうに見えたきのこを食べたとたん苦しくなつて意識がなくなつたんだ」因みにそのきのこは猛毒であつた

・・・我ながらありえないな、うん

思い返せばここ数ヶ月は不幸のオンパレードだつた

マンションの上から植木鉢が降つてきたり（額にかすつた）トラックがつつこんできたり（後頭部にかすつた）人間違いで殺されそうになつたり（脇腹に包丁がかすつた）何故かマンホールの蓋が開いていたり（指が引つかかつて助かつた）などなど・・・

細かいことを入れれば百はあつたんじゃないかな、うん

父さんが僕に常々「何があっても生きる、生きてさえいればいい」と言っていてこなかったら、最初の数回で諦めていただろうな

しかしまあやれやれである、結局のところ僕は死んだのだろうか？

別に天国や地獄に行くとはまでは思わないけど、いきなり森の中とはこれいかに

もっと分かり易く「あなた死にましたよ」って言うてくれないと懺悔のしようもない

いやこの思考こそ、本当に仕様のないことなのかも知れないけど・

と、そこで枝がピキピキと音をたてているのに気がついた

(あ、これは折れるな)っと思う間もなく枝は折れ、頭が地面に吸い込まれる

異常に鈍い体を何とか動かし頭を庇うが、思った程の衝撃もなく地面に落ちた

そこでようやく僕は体を動かして辺りを見る気持ちになった

どうやら森のかなり深い所らしく、人の気配など微塵もない

僕が死んだ(?)はずの無人島はこれほど背の高い木々はなかったように思うし、なにかが足を踏み入れた形跡すらない

そう、僕の足跡すらないのだ

よってここはあの無人島ではないはずだ

他の可能性を考えても、あれほどの高さに僕を引き上げる動物なんているはずもないし、いたとしたって地面に何かしらの跡が残るはずだ

あるとすれば人為的に行われるぐらいだが、それこそメリットがなさすぎる

うむ、このミステリーは僕には解けそうもない

解けないこと、分からないことは後回し

テストという関門を毎度ぐくり抜ける日本学生にとって必須のスキルだ

しばらく辺りを歩いてみるが、特に何も無い、いや、あるにはあるが、素人では判断のつかない事ばかりで意味を見出せない

ここが安全である保証は全くないので、早急に移動しなければ

因みに動物はいるようだ

鳥(?)の声があちこちから聞こえてくるし、虫もいる

獣道のようなものも見つけたし、縄張りの主張のために傷つけられた木も見つけた

傷の位置は大体下から2mぐらいの位置だ

・・・やばい、これはつまりその位置に傷をつけることができる動物がいるということだ

熊だとしたら絶対になわなない、死んだふりは効かないらしいし

兎にも角にも移動しなければということ、僕は太陽(?)の位置を方角の基準にすることにした

太陽(?)の方角は登りぎみで、逆は下りっぽかったけど、僕は太陽(?)の方角に向けて歩くことにした

先ほどから太陽に?が付くのは確信が持てないからだ、もしかしたら地球にとって月にあたるものかもしれないし、沈んだり昇ったりするのもわからない

・・・しかし面倒なので、僕は太陽(?)を太陽だと思い込むようにしよう、私がそう思うからそうあるのだ、って昔の偉い人も言うてた気がするし

水場を探すなら降りるべきだけど、この場所の状況が知りたい僕はあえて登ることにした

本当なら木に登って辺りを見渡せばいいんだけど、現代の高校生にそれを求めるのは酷である

そんなこんなで登り始めて2時間ぐらい、一向に見晴らしがよくなる心配がない

太陽も低くなってきた、このままいくとこの人工物の一切ない場所
で野宿である

流石にあぶないよな、寝て起きれませんでしたじゃ洒落にならん

ちょっと登り始めたのを後悔し出した頃、木々の切れ間が見えた

少し駆け足でたどり着くと、そこは崖になっていた

・・・絶句するほど美しい景色を、僕は人生で初めて見た

夕日が赤く染めあげることでの周りの山々は、その威厳をさらに強く
し、木々に何とも言えぬ色彩をあたえていた

澄んだ空気はどこまでも見渡せて、夕日の下にわずかに海が見えた

ちょうど僕が立っている場所の真下が川の初めにあたると、そ
こから川は蛇行しながらも確かに海に続いている

雲は流れ、風が吹き、僕は人生で初めての感動に酔いしれた

(山に登る人はこれを求めていたのか)と、なんとなく知った風な
事を思い描いていると、川の途中に橋が架かっているのが見えた

その辺りを注意深く見ると、右側に人工物のようなものがわずかに
見えた

よかった！人がいる！と、歓喜をあげようとして思い出す

(夜、どうしよう・・・?)

村に着くまでにどう考えても日が沈む、というか2、3日はかかりそうだ

日が完全に沈む前に寝る場所を決めなければいけない、サバイバル経験皆無の僕にだって分かることだ

一旦森の中に戻り、良さそうな場所がなかったか思い出す

(あそこは落ち葉がたくさんあったから、それに埋もれて寝れば安全かな?それともあの岩場の隙間で寝た方が・・・)

などと考えていても、先ほどの景色が頭から離れず、つい振り向いて呆けてしまう

(いつか、いつかもう一度行こう)

そう考えていると、背筋が凍るような、嫌な予感が僕を襲った

僕はとつさに、後ろに倒れるように回避行動をとろうとした

死ぬ直前に起きた百を越える不幸が、彼に第6の感覚を与えていたのである

瞬間、右腕に強い衝撃

左肩から倒れこみ、前転をするように受身を取りながら、予感の正体を確認する

そこには3mを越える背丈の怪物がいた

人の形をとってはいるが、体の大きさや手足の指の本数、グレーに近い体色、何より赤い、瞳のない目が人でないことをありありと証明していた

と、そこで、怪物の指先に赤いものが付着しているのに気がつく

おそらく人の血だろう、かなり新鮮で乾いておらず、付いて間もないことが伺える

その段階でようやく気がついた、右腕の感覚が全くない

恐る恐る見てみると、僕の右腕は二の腕を1/5程残して消えていた

僕の終わりと始まりについて（後書き）

勢いで書いてしまった、今は反省している

私は昔から執筆活動に興味があつて、書こう書こうと思つていただけど、どうにも億劫で遂に今にいたつてしまいました。

この作品は、そんな自分の背中を押すために書いた作品です。

つまり見切り発車です。

ですので、いきなり更新がなくなったり、展開がおかしくなったり、数々の矛盾があると思いますが、なんとか完結させてやりたいと思つております。

どうか生暖かい目で見守つてやってください。

感想なんかを送ってくださるととても嬉しいです、厳しい意見もどんとこいです、よろしくお願いします。

怪物の在り方（前書き）

とりあえず投下、誰かが読んでくれたらうれしいです。

怪物の在り方

「つつつ………!!!」

危うく叫びそうになって、何とか声を押さえつける

相手は見たことも聞いたこともない化け物、叫ぶ事で警戒させる事が出来るかもしれないが、それが発端になってすぐに殺される可能性の方が高い

命の危機に瀕したことで、死んでから今までいまいち回転の遅かった頭が、いつもより速く回り出す

痛い、熱い、痛い、嫌だ、いたい、イタイ、アツイ、イヤダ、イヤダ、イヤダ、

左手で右肩付近を握り、一応の止血をする

右肩から心臓の鼓動に合わせて血が吹き出す、嫌な汗が全身から吹き出す

いやだいやだイタイイタイイヤダアツイイタイ

今までだってこんな絶体絶命を生き延びてきたんだ、大丈夫、きっと生き延びる可能性は残ってるはずだ！

太陽に向かって走り出す、と同時に化け物がこちらに飛びかかってきた

イタイイタイイヤダイヤダナンデイヤダイヤダツライイタイ

体の大きさに見合わずとんでもなく速いつ！僕の全力疾走の2倍ぐ
らいの速さだ

木々を盾にしながら、できる限り不規則に走り太陽を目指す

イヤダイタイいたいいたい痛いよう・・・

大量の出血のせいで頭がくらくらする

化け物は僕を追い詰めるよう、僕の通った跡そのままに着いてくる

大丈夫、しっかり冷静に考えればきつと生き残れる

時々背中に掠めるような感覚があるが、振り返らない

痛いよ、熱いよ、寒いよ、辛いよ、痛いよう

大丈夫、この先にきつとあそこがある

化け物の追撃を何度となく避けながら、目的地をようやく見つけた

僕は遂にあの美しい崖までたどり着いた

僕が振り返ると化け物がこちらを不満げに見ていた

大丈夫、勝負は一瞬だけど、速さは僕より少し速い程度、大丈夫

僕は自分に少し嘘を吐きながらタイミングを図る

・・・化け物が笑った様な気がした

瞬間飛びかかってくる化け物

僕は奴の股の下を滑り抜ける

野球のスライディングの要領で股下をくぐり抜け、化け物の尻目掛けて蹴りを放つ！

弱者が使う強者に勝つための常套手段、それは他の力を使う事

例えば敵の力、例えば重力、例えば相手の油断、それらをフルに使って初めて弱者は強者に勝てる

これで決まればよかったが、僕の蹴りは空を切った

僕が的外れの蹴りを放った訳じゃない

怪物が、僕の認識できる速度よりはるかに速く動いて視界から消えたのだ

音を使りに右を向くと、やはり奴は笑っていた、僕を嘲笑っていた

そうだ、奴は僕が五感で認識出来ない程の速度で、僕の右手を奪っていた

これまでの追いかけてこは、奴にとってはただの遊びだったのだろう

駄目だ、失敗した、おわりだ、しぬ、しんじやう

ならば次は、さらにこの命を賭けるのみ！

僕は崖に向けて駆け出し、飛んだ

あの川の所に落ちれば、もしかしたら生き延びれるかも知れない

しかしその希望も、すぐに打ち碎かれる

いつの間にか怪物は僕の後ろに立っていて、飛んでいる僕の足を掴んだ

そしてそのままゆっくり振り上げ、反対の地面に叩きつける

咄嗟に左手で頭を守ったが、脳が揺れる、体が軋む、口の中に血の味が広がる

怪物は握っていた僕の右足を根元から握りつぶした

痛いいたいしぬしぬしぬしぬシヌシヌシヌシヌシヌ

僕は奴の手を左足で蹴り、反動で距離を取る

しかし怪物の遊びは終わったのか、即座に近づき拳を僕のお腹に向けて振り落とした

左足で拳に対抗しようとするが、難なく縦に押しつぶされた

その反動で少し距離が取れたが、もはや僕の命は風前の灯火、春の夜の夢だろう

僕は奴から出た僅かな血と噛み千切った皮を飲み込んだ

シヌ？しぬ？死ぬ？死んだ？もう死ぬの？死にたくない死にたくない

いや、我ながら最後の抵抗は見事だった、うん

なんてっ たって奴に血を出させたんだから、普通の人間にや出来ないぜ

よくがんばったよ僕、えらいえらい

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

僕はゆっくり崖に向かって放物線を描く

崖の端に生えている木の枝の下をもうすぐ通り抜ける

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

・・・僕の本能はまだ諦めてないみたいだな

あの枝、手を伸ばせば届きそうだな

まあ伸ばす腕がないんですけどね

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！

腕があれば、もっとあの化け物に、痛い目に合わせてやれるのに

足があれば、もしかしたらあの化け物から逃げられたかもしれないのに

目に小さな小さな村が見える

あそこに住んでる人たちは、この化け物に対抗できるのかな

もし生きてたら、ここに危険な化け物がいることを警告できるのに
もっと強い腕があれば、もっと強い足があれば、もっと強い体があれば

・・・畜生、生きたいな

お腹の底が熱くなる、今の僕の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだろう

あの枝に届く腕が欲しい、あの化け物を蹴り飛ばせる足が欲しい、
無茶な行動に耐えられる体が欲しい！

死にたくない、生きたい、生きたい、まだ、生きていたい！！

気付けば僕は、枝を掴んでいた

怪物の在り方（後書き）

とりあえず主人公覚醒、次号待たれよ

一方的な在り方

脳が溶けそうになる程頭が熱い、意識が体を突き抜けたようだ

よく分からないけど、手足が元に戻ってる

化け物がこちらを見てる

だけど不思議と命の危機は感じない

世界はまだゆっくりなままだ

さあ、平穩を取り戻そう

化け物がそばにあった木をヘシ折って上段に構える

そのまま僕に向かって振り下ろしてくる

僕は右手を頭上に持ち上げて、防御の姿勢をとる

今までだったら無事で済まなかっただろうけど、今なら

振り下ろされた木は、僕の右手に当たり、そこで止まった

木が僕と化け物の間でたわむ

化け物はそのまま力を入れつつけ、遂に木が折れた

その折れてギザギザになった断面を僕に突き入れる

僕はその先端を左手ではたく

それだけで狙いがズレて、その突きは外れた

化け物は僕と距離をとり、木を上空に投げた

木は空高く舞い上がり、僕の方に落ちてくる

と、同時に化け物が駆け出し、僕との距離を詰め、必殺の拳をくりだそうとする

僕は木が落ちてくるまでの時間を、のんびりと待って、化け物が詰めてくるのを待った

そして、化け物が拳を放った瞬間、一步だけ前にでた

化け物の懐にはいった僕は、右手を化け物の胸の中心に、突き立てた

化け物は何が起きたのか分からない様だった

木が地面に落ちる大きな音がする

僕が、右手を捻りながら抜くと、化け物は三步下がって膝を地面に

着けて、こちらを睨む

化け物は、最後の抵抗とばかりに走ってくる

僕はその頭を蹴り上げる

パンツという音と共に、怪物の頭が血飛沫に変わった

化け物はまるで僕を抱きしめるような姿勢のまま、僕に倒れかかり

やはり僕を抱きしめずに倒れた

体中に化け物の血が着いているが、僕は唇についた血を舐めとって

そのまま意識を手放した

～近隣の村～

(・・・ん！？)

何か、とてつもなく大きな力を感じた

山の方からだった、見える範囲では異常はない

(ふむ?)

あれが魔法によるものだとしたら相当な規模だ

それこそ、山ごと村が吹き飛んでもおかしくはない

視界に入らない程遠くの出来事とは考え難い程の力の大きさだった

私は全神経を集中しながら山の方を警戒するが、異常は感じられない

・・・思い過ごしだろうか?

今の世の中、何が起きてもおかしくない

警戒のし過ぎと言っことはないだろう

今後、今少し警戒を強めよう

・
・
・
・
・
パ
パ
?

〜
?
?
?
?
?
}

一方的な在り方（後書き）

え、実はこれで最終回です

嘘です、ここまですがプロローグです

まだがんばります！

ここでの在り方(前書き)

投下だぜ!

「」での在り方

・・・？

・・・さ、寒い・・・？

・・・けど、もうちょっと寝ててもいいよね

もうちょっと・・・

そういえば、布団はどうしたんだろ？

地面も若干固い気がする・・・

まあいいか、お休み・・・

・・・

そういえば、怪物はどうなったんだっけ？

・・・ん？怪物？

「のわああ~~~~!!?」

一気に目が覚めた、そんな朝的一幕

叫んだ僕は急いで周りを見渡すが、怪物らしきものはいない

(ふう〜〜・・・)

とりあえず一息つくが、心臓はバクバク、大爆発寸前だ

(でも、死体らしきものすらないのは何でだ?)

不思議な事に、怪物の死体は消えていた

(もしかして、・・・夢?)

怪物がヘシ折った木の跡があったので、全くの夢ということはないだろうけど・・・

それに・・・

「この腕、どうなってるんだ・・・?」

そう、僕の腕は怪物と同じグレーの色をしていて、体との接続部分はグレーと肌色で複雑な模様を描いている

足も同様だ

とにかく、状況を整理すると

- 1、あの時僕は怪物に出会い、命からがらこの崖まで逃げてきた
- 2、両手両足を失いながらも反撃し、逃亡を試みたが、あえなく崖に放り投げられる
- 3、突然手足が生え、何故か負ける気がしなくなって、事実怪物に

勝利

4、その後意識を失う

・・・ふざけてるな、特に3番目

っというか怪物だよ怪物、ありえないよ

あんな生物いたら普通にテレビで放送されるよね

もしかしてUMA？未確認生物？

いやいやビックフットは雪山に出るんじゃないっけ

ていうかここいらの植物も見したことないものばかりだし

そつえば僕、どうしてあんなに動揺してなかったんだ？

いくら何でもいきなり宙吊りにされたらパニックと思うんだけど

さらに言えば木から落ちた時も衝撃が全然なかったし

そつだ、怪物って1匹（？）なのかな？

あんなのが群れで襲ってきたら命がいくつあってもたりないよ！

次から次へと疑問が浮かんでは消えていく

だけど、その中で一番大事なことは

「……喉が乾いたあ」

これである

昨日は全く欲しくなかったけど、今はとにかく一杯の水が欲しい

そういえば、崖の下に川が流れていた筈だ

崖を覗いてみると、やっぱり川があった

というかどうなってるんだ？川が僕の真下から流れてる？

とにかくあそこに行けば、水が飲めることは間違いなさそうだ

（さて、行くにしても、どうしたもんだろうか・・・？）

崖は視界の端の方までずっと続いていて、迂回するのは億劫だ

普段なら絶対取らない手段だが・・・

（飛び降りる・・・か？）

今はこの腕と足がある

もしかしたら耐えられるかも知れない

とりあえず、垂直飛びを試してみた

プーン

・・・軽い擬音で表現し過ぎだけど、3mぐらい飛べた

正直、怖かったあゝ

しかし、崖下までは100m位はあるんじゃないかな・・・？

次はもう少し力を入れてみた

ビヨン

ドスン

10mぐらい飛べた、正直死ぬかと思った

・・・うん、いけそうダネ

僕は深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる

大丈夫、大丈夫、いざとなれば川に落ちればいいんだ、大丈夫

深く息を吸って、軽く助走をつけて、飛ぶ！！

えも言われぬ浮遊感のあと、もの凄い速さで落ちていく、落ちていく

股の間がキュッってなった

けど、ある程度すると、崖の下の壁が近づいてきて

そこに手や足を突き出し、減速しながら落ちていくと、だんだん楽しくなってきた

横に回転したり、縦に回転したりして遊びながら落ちていくと、地面が近づいてきた

僕は空中で前転しながらタイミングを計り、手と足を地面に叩きつける！

当たりに鳥の飛び立つ音が聞こえる、キマった！

ズボンのお尻が破れている事に気づいたのは、それからしばらく経ってからだった

川は初め、少しだけ滝になっていた

崖の下の裂け目から流れ出ているようだ

水は日本でも滅多に見れないくらい澄んでいて、逆に飲むのをためらってしまった

しかし、一口飲んで、あまりのおいしさにガブガブと飲みまくった
鋭く冷たく、どこか甘い、世界の名水100に絶対エントリーすべきだ

結果お腹を下し、人生で初めて木に隠れて野ソをした

お父さん、息子はがんばって生きてますよ

そんなわけで、一息ついて、あらためて考える

いきなり森の真ん中にあらわた僕

襲ってきた怪物

生えてきた腕

全くもって分からないことだらけだ

幸いにも気温はそこまで低くなく、ここは影になっているうえに、短パンになってしまったズボンと、ノースリーブになったシャツや上着でも、ちよつと肌寒い程度で済んでいる

もしかしたら夏なのかもしれないが、有難いことである

あの怪物の返り血は、起きた時には跡形もなく消えていた、そこはラッキーだったのかも知れない

血染めの服なんて嫌だからね

そして一番気になることが、この地方に、いや、認めよう、この世界に僕の様な人間がいるかどうかだ

ここは、おそらく異世界なんだろう

怪物もでてきたし、腕も生えてきた、元の世界ではありえないことだ

あの怪物が、実はこの世界の人間にあたる存在で、崖の上から見たあの橋も、その脇の人工物も、全部あいつらが作ったとしたら

僕はどうやって生きていけばいいのだろうか？

とにかく、今、一番大事なことは……

グウ~~~~

一番大事なことは……

キュルルルル~~~~

一番大事なことは、腹が減ったということだ

1111での在り方（後書き）

少年の冒険が、始まる・・・

メリー・クリスマスですね

そう、今日はイエス・キリストが死んだ日

人の死を祝うなんて、お前ら人間じゃねえ！（タケシ風に）

知ってます、生まれた日なんですよね

私はこの3日間、仕事です

みなさんの幸せを願っています（^3^） /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6764z/>

魔血吸の在り方

2011年12月24日07時53分発行